Japan Association for Language Education and Technology

ＬＥＴ関東支部だより

第３８号

２００６年１０月発行

外国語教育メディア学会

ごあいさつ

これからのＬＥＴの活動の方向を決めるもの

外国語教育メディア学会　関東支部長　見上　晃（拓殖大学）

皆さんはこれからの学会の進む方向を考えたことがおありでしょうか。学会は誰かが運営していて自分はときどき大会に参加するだけ、という方もいらっしゃるでしょう。多くの方にとってはそれが普通かもしれません。学会がどんな方向に進もうと自分とは関係がないと思っているかもしれません。

しかし学会はそもそも同好の士の集まりと言っていいでしょう。志を同じくする人が一緒に活動していくところです。学会がどういう方向に進んでいくかは、ひとりひとりの教員が自分の進む方向を指し示すベクトルの総和の示す方向といっても良いでしょう。個人がどう進むかが全体がどう進むかに大きく係わっています。

LET の創世期には当時の学会の名称 LLA が示すように LL をどのように使うかを、みんなで論じたのでしょう。（残念ですがそこには参加できませんでした。）その後いろいろな LL 授業についての問題点が話し合われたのですがきちんとした結果が出たものも、結果が出ずに今日に至っているものもあります。

LL では教室としては LL の設備があるが授業ではその機能を使っていない授業があるという例がありました。また LL を使うのは一部の物好きな先生だけだということも論議されました。もちろん学会内ではこの声は少数派でしたが一歩外に出れば両者の声は均衡していたように思います。また LL では個別授業が可能ですが個別授業と一斉授業を授業時間という限られた枠の中でどう展開していくかといった議論もありました。

これらはコンピュータが教室に入ってきた今でも同じではないでしょうか。コンピュータが出たときに多くの先生は LL で果たせなかったことがコンピュータがあれば出来ると考えたのではないでしょうか。LMS などを活用して学習時間や到達地点を教員が制御できるのに一方的に学習時間で単位が与えられるなどあまり制度的には進化していません。問題はそのまま持ち越されているのだという意識が必要です。

以前から学会ではコンピュータについていろいろな利点、欠点が論議されてきましたが先生方にとってこれほど速く教育の場にコンピュータが浸透してくるとは思わなかったのではないでしょうか。今まで自分とは関係がないと思っていた方も効果的な利用法を考えないではいられなくなっています。自分には関係がないと思っている方が学界全体を後ろに引き戻そうとしているのかもしれません。

日常生活でもコンピュータは必需品となってきています。デジタルディバイドは起こっているのです。学校でもほとんどコンピュータに接することなく、家庭にもコンピュータがないといった方々にとって私たちの学会は情報の宝庫と言っていいでしょう。今まで積極的ではなかった方はもっと積極的に研究会等に参加されることをお奨めします。また周りに無関心な方がいたら是非私たちの学会に誘って新たな道を指し示してあげてください。

私たちは啓蒙活動にも力を入れていきます。研究会の講師等は交通費等の実費負担だけで派遣する方針でいます。是非この学会を活用していただき、さらに活動に積極的に参加されることを期待しています。

ー 私の教材選定基準 ー

外国語教育メディア学会元会長　　大八木　廣人（元拓殖大学）

提言というようなものは書けませんから、数年前に退職するまでのことを想い出して、私の教材選択基準を簡単にご説明します。

学習目標とシラバス

一般的には、学習者の知力や教養を高め、ことばの機能を理解しながら４技能に習熟し、併せて、文化的で国際的な視野を広げるなどの学習目標があります。いずれの項目をより重点的に学ぶかを選択します。

その上で、私は「何を教えるか」を先ず考え、シラバスを検討することから始めます。ことばの配列や母国語とのさまざまな違いを無意識のうちに学び、しかもバランスの取れた言語学習にとって、文法は欠くことのできない要素です。文法を中心に据えた Grammatical syllabus や、構造言語学の影響を受けた Structural syllabus を挙げなければならないでしょう。しかし、これらのシラバスは言語の複雑な現象を正確に表していないとか、コミュニケーションを重視した授業には適していないところがあります。例えば、The cliffs are over there.を文法や構造からみると、一つの文型に当てはまるだけに過ぎませんが、この文の行間には(1)That's the way to the scenic view.や(2)Be careful of the cliffs!や(3)How about a walk along the cliff top?などの情景が浮かびます。これを言い換えますと、(1)の文は Directions を、(2)は Warning を、(3)Suggestion になります。このようなコミュニケーション重視の Functional syllabus、Time, Quantity, Space などの「概念」を加えた Functional/notional syllabus、そして、これらをいろいろ組み合わせた Functional/situational syllabus や Functional/task-based syllabus などもあります。これらの中から自分の授業の目標に合わせて選択します。

Needs への配慮

ESP か General English かという選択や難易度などによる選択もありますが、 学習者が求めている Needs をしっかり確認する必要があると思います。即ち、学習者の将来の学習や職業などへの必要条件、社会からの要請、学習手段などからの Necessities、学習者が個々に求めているものとしての Wants、そして、学習者に欠けているものとしての Lacks などの面から配慮します。当然のことながら、中学や高校でどのような学習をしてきたかとか、今どのようなコースに属しているかなどは重要な要素でしょう。

Authenticity のある教材

Speech として考えると、実際に話されている自然な話し言葉をそのまま教材に取り入れたものということになりますが、必ずしも「ほんもの」でなくても、自然であるかのようなもの、例えば映画なども指します。従って、シラバスや言語構造など加味して、できるだけ自然な話し言葉になっているものを選びます。

活発な授業展開が可能なタスクのある教材

Listening 教材では、Before listening stage と While listening stage と After listening stage に分けて、それぞれにどのようなタスクが用意されているかを詳しく検討します。私は、最初の Warm-up になる部分を最も重視します。

ＬＥＴ関東支部第 116 回研究大会を終えて

湯舟　英一（東洋大学）

今回は会場校担当として会場準備と総合司会を勤めさせて頂いた。この場をお借りして、私の目から見た研究大会の横顔についてご報告したい。東洋大学では昨年より文系５学部の全学生約２万人が白山キャンパスで授業を受けており、土曜日とはいえ過密な教室利用の中での会場確保となった。当初は必要な教室数を確保できるか微妙な状況だったが、その後、大学や他教員の理解と協力を得て、なんとかベストスペースを確保することができた。また今回は 17 社の賛助会員の参加があり、展示会場はいつにも増して大盛況であったが、発表会場に行くべきか展示ブースで話し込むか、とりわけ悩ましい選択であった。

一方で、早朝の開会式の参加者が少なかったことは今後の課題となった。今回は、東洋大学としても４キャンパスを結んだ遠隔授業に力を入れており、また学長も e-learning に関心があったことから、学長自ら会場校挨拶を引き受けられたのだが、参加者のあまりの少なさに、同じく挨拶に立った見上支部長からは「都心での開催という利便性が逆に早朝からの出足の鈍さを招いたのではないか」とフォローして頂いたが、今後は開会式にも何らかのインパクトや工夫が必要ではないかと感じた。開会式の前に１時間程度の早起き講習会の開催などはどうだろう。勿論モーニングコーヒーは無料である。

さて、今回も受付や会場設営の補助として学生アルバイトを募集した。幸運にも、字の上手な元気印の女子学生３名と、重たい机も難なく運ぶイケメン男子学生１名の計４名という理想的な布陣を構えることができた。なかでも最後の全体シンポジウムで、フロアマイク係としてバイト時間を過ぎても献身的に協力してくれたことは印象深かった。後日、授業の時に改めてお礼を言ったところ、彼らも、事務局のお兄さんやお姉さんたちがみな優しくて、仕事もとても楽しく、機会があったらまたやりたいと言っていたが、それはもうないだろう。

当日の昼食は、地下の学食フードコートを利用して頂いた。ここは昨年出来たばかりで、有名ラーメン店やステーキ店など専門店が軒を連ね、会場校としても目玉の施設であったが、上述のように土曜日といえども授業の学生が多く、店の前には長蛇の列が出来ていた。とりわけインド料理店のチキンカレーは人気であったが、予想外の辛さに額に汗する某先生の姿が印象的であった。

というわけで、会場校担当の仕事というのは、プログラムに参加できる時間がほとんどなく、また準備や裏方として過酷な労働であるということが今回担当してみてよくわかった。そういう意味で貴重な経験をさせて頂いたという感謝と、これまで会場校を担当してこられた多くの先人の方々、およびこれから担当する方々の苦労と心意気に頭の下がる思いである。

シンポジウム 1

「語学と e-Learning―Moodle の事例から学ぶ」より

神田明延（首都大学東京）

支部大会の口火を切る「シンポジウム１」は語学教育における e-Learning を考えるために、LMS で語学に向いていると言われる Moodle の紹介とその実践報告を主な内容としました。LMS とは BBS, メール、問題作成ツール、チャット、共有フォルダなど様々なウェッブ機能をモジュールという単位で統合して、e-Learning を円滑に運用する枠組みとして近年脚光を浴びているものです。

司会の現筆者・神田から先ず e-Learning の定義でマルチメディア、双方向性などを挙げ、語学教育との親和性を強調しました。さらにそのプラットフォームである LMS における Moodle の位置づけやその基本特性を手短に述べ、シンポジウムの基調説明としました。

そして次に日本の語学分野における Moodle の第一人者である原島秀人先生(前橋工科大)より、その特性と諸機能の詳解がありました。特にインターネット新時代を表す Web2.0 という概念から Moodle を解説され、ユーザー主導のネット革命として、参加者がデータを提供することによってオンライン・コミュニティーが活況を呈するネットの世界の象徴的存在であることが分かりました。そもそも設計思想である Social Constructionist Pedagogy が協調学習を促すものであり、まさに時代の寵児的な存在であります。さらに、Moodle の新機能にも触れられ、ブログ、携帯電話対応、Podcast 対応など、フリーのオープンソースの強みを活かして世界中の Moodler により日々進化していくという期待を持たせてくれました。

さらに Moodle を使った授業実践の報告が御二方からされました。一人目は栄本和子先生（関東学院大）で、所属学部での導入から運用に至るまでの苦労談を交え語られました。特に英語の学力が不足する学生を、学習環境を整え、ネット会議、ディスカッションなどの双方向的やりとりを交え、何とかして学習意欲を高めようとする思いがひしひしと伝わって来るものでした。自ら PC 操作を学びに出るなど、陰の努力を惜しまない姿勢に頭が下がる思いです。そのような教員負担がどうしても e-Learning には付きもので、サポート体制強化が望まれます。

二人目の跡部智先生(慶應義塾普通部)からは、大学、中学、高校など様々な現場の中での Moodle 活用を示された実践報告でした。一つは医科学生の上級者へのライティング授業で多読ならぬ多書を Moodle のフォーラム機能を使い、Peer Marking まで行われた例です。これは典型的な Moodle の使い方と思われます。さらには中学生がドイツ語やロシア語を学ぶのに、大学の当該研究センター教員のサポートの橋渡しに Moodle を使ったり、大学の教職課程でのシラバスデザインに利用したり、様々な利用が工夫次第でできることが興味深い所です。

そして、後はフロアの方々の質問・意見の交換が活発になされました。3 人の発表者も含め大よそ Moodle に関しては、どうインストールするサーバーを確保し運用していくかが大きな問題で、学内のものか、学外か、また私的な運用か、組織だったものかで、それぞれサポートや運用体制、処理能力に違いが生じてくるようです。フリーである反面、製品版にない悩みもあることが今後の課題ですが、Web2.0 的に Wisdom of Crowds(大衆の智慧)で、それぞれの現場で解決が望まれます。

シンポジウム 2

外国語教育における e-Learning の現状と問題」報告

奥　聡一郎　（関東学院大学）

初夏を思わせる 6 月 3 日の土曜日、東洋大学白山キャンパスの６号館において第 116 回外国語教育メディア学会関東支部研究大会が開催されました。都心とは思えぬ閑静な白山の地に聳え立つ真新しい６号館 6210 教室に百名を超える会員・非会員・会場校関係者の参加がありました。

今回の大会テーマ「e-Learning 最前線」をテーマとした外国語教育メディア学会関東支部研究大会のシンポジウム 2 では、e-Learning と呼ばれる学習システムの導入にあたって、それを支える技術の問題、教育効果と学習者の課題やコンテンツ作成など研究と教育の基盤となる事例を紹介していただき、新しい可能性について論じてもらいました。

e-Learning とは一般的に「時と場所、機器を選ばず、インターネット、イントラネットを介して配信されるコンテンツやツールを利用して知識やスキルを習得する」システムと定義できるでしょう。現在ではネットの介在を中心とした WBT (Web Based Training)から，携帯通信機器(携帯電話やデジタルオーディオプレイヤーなど)も教育に利用することが可能と考えられています。e-Learning の教育システムの特徴としては、教える側と学ぶ側の双方向性、いつでもどこでも学習できるという非同期型学習があげられます。教育方策上の具体的な利点としては、教材の反復使用、録画された授業の反復視聴、理解度に応じた学習と支援、学習成果の把握、個別指導が可能になることなど大きなメリットがあるのは確かです。

シンポジウムでは外国語教育の教育システムとして何ができるのかを主眼に、e-Learning の最新の動向と課題を 3 人のパネリストの先生からお話していただきました。

早稲田大学の保崎則雄先生は「e-School の属性と経験知、学習知―教育方法から教育システム構築へ―」の中で、e-School の構築とそこから生まれた様々な学びの形態を発表されました。次に独立行政法人メディア教育開発センターの小野博先生は「大学生を対象とした新しい英語教育－リメディアルから始め、「仕事に使える英語力」の習得プログラムの開発について－」の発表で豊富なデータから e-Learning の学習効果の問題点を鋭く指摘されました。最後に、青山学院大学の小張敬之先生は「ユビキタス時代の統合的英語教育－WBT から評価まで－」と題した発表では e-Learning の専門家の育成から大学英語教育における実践例とそれを支える教育理念、携帯電話の活用事例まで詳しく説明され、やはり機械だけでなく教える人間も介在するブレンド型の方策の必要性を訴えておられました。このような最新の事例紹介から図らずも e-Learning の抱える問題点が浮き彫りにされ、今後の課題と有効活用の方途が質疑応答を通して示されたと思います。

このシンポジウムでは e-Learning におけるコンテンツ作成の難しさ、リメディアル教育の必要性、多様なメディアに対応できるリテラシーの育成など、e-Learning の長所だけではなく実践している立場でしかわからない問題点が多く指摘され、今後の活用と導入のための展望を示していただきました。シンポジウムに参加された皆さんとともに有益な情報が共有できたと思います。閉会行事の後の懇親会でも参加者同士の情報交換の輪が拡がり、最後まで盛り上がりを見せたシンポジウムとなりました。

最後に今大会の開催にあたり、会場校の東洋大学の関係者の方々にお世話になりました。また関東支部の事務局の受付、会計、設営の先生方、沢山お励ましをいただいた支部長、副支部長、運営委員会の研究会企画の先生方にも深く感謝いたします。

授 業 の ア イ デ ィ ア

*Criterion*SM Online Writing Evaluation と learner corpus と peer feedback

木村 恵（獨協大学）

1. はじめに

本学では ETS®が提供している英作文自動採点システム、*Criterion*SM を用いたエッセイ・ライティングの授業を行っている。教員が一人ひとりの学生のエッセイを読み添削するには多くの時間が取られ、その実施は容易なことではない。そこで e-learning システムが大きな助けとなるわけだが、エッセイ・ライティングにおいては特に、「(人間の)先生が見ているわけではない」という意識がやる気の低下につながりがちだろう。また、自分のエッセイがクラスメートと比べてどの程度の「デキ」なのか、というところも気になるところだろう。そこで、コンピュータ上でのエッセイ・ライティングの特性を生かし、なおかつ学習者同士で刺激し合える方法を模索しながら行っている実践を報告する。

2. 受講者・教室環境

実施しているのは、1 年生上位クラスの必修科目である E-learning (Short Essay)という授業で、受講者は約 50 人である。コンピュータ教室を使用している。

3. *Criterion*SM

このプログラムは、ある課題についてのエッセイを画面に入力、submit するとほんの数秒のうちに 6 段階の評価(*Holistic Score*)と、より分析的な観点による文法の誤りやパラグラフ構成についてのフィードバック(*Trait Feedback Analysis*)が返ってくる機能を持っている。この 2 つの観点からのフィードバックにより、学生は指摘された誤りを直しつつ、より高いスコアを得るために繰り返しエッセイを書き直しては submit の回数を重ねていく。授業では,「○点を目指すように」ということは特に指示せず、「学期を通してどれだけスコアが上がったかを評価する」と告げる。ポートフォリオ機能が、授業担当者にとっても、学生にとっても良い目安になる。

4. 学習者コーパス (learner corpus)

*Criterion*SM に submit されたエッセイは、全てテキストファイルに移すことができる。そうすると各種コーパス処理プログラムを使い、いろいろな分析や加工が可能になる。例えば語数はもちろん、使用している語彙の豊富さ、1 センテンスの長さなどの平均を参考として見せることができる。また、エッセイ・ライティングの指導の一部として「いろいろな形容詞／副詞／接続詞をもっと使うように」ということを言うとき、テキストファイルに品詞タグを付与し、学生が使用した各品詞の単語を Excel ファイルにずらりと並べる。これを学内の LMS 上に載せ、学生がエッセイを書きながら参照できるようにするのである。「皆さんのクラスメートが前回のエッセイで使った形容詞の一覧ですよ」と言われることで、学生が刺激を受けることを期待している。また、このようないわゆる学習者コーパスが蓄積されることで、将来的には本学の学生の英語パフォーマンスを詳細に分析することや、良い／誤りのある文(文章)を用いてのオリジナル教材作りなどの可能もあるだろう。

5. 学習者間評価 (peer feedback)

半期を終え、コンピュータに向かうだけの学習ではそろそろ飽きてきたのでは…、と心配された最近では、クラスメートとペアを組んでのpeer feedbackの時間を多く取っている。*Criterion*SMのスコアが同じだったもの同士を教員側で組み合わせ、お互いのエッセイを読みながらフィードバックを行う。既に*Criterion*SMに何度もsubmitし、文法的誤りがほとんどないものなので、特に抵抗はないようである。*Criterion*SMが見逃したエラーを指摘するということに加え、どうしたらもっと内容が充実し、面白い読み物になるかを一緒に考えることが主目的だと指示している。また、授業後には「パートナーのフィードバックが有益だったか」について5段階の得点とコメントで相互評価をさせている。

Moodle を使った複言語学習の試み

跡部　智（慶應義塾普通部）

春の関東支部大会では、ムードルという Web 学習支援システムを紹介しましたが、ここでは授業のことをその後の経過を含めてご紹介します。

1. メディアで学ぶ外国語

この授業は、３０講座ある選択科目の一つで９人の中２，３が履修しています。毎週９０分間、１学期はドイツ語、２学期にロシア語を学習します。大学外国語教育研究センターの森泉先生、金田一真澄先生に年に２回来てもらうお願いをして、あとは NHK のテレビ番組を教材に使います。

２.「ドイツ語会話」

番組構成は２０年前とは雲泥の差です。今年はサッカーのワールドカップがドイツで開かれることもあり、ドイツに行くという目標を明示してスタートします。講師はほとんど出てきませんで、日独語堪能な男女と生徒役の有名タレントが進行します。動機付け作戦は大成功のようで、Moodle に書いてもらった感想も好印象でした。（一部抜粋）

- 非常にわかりやすく、かつ楽しくドイツ語を覚えられます。
- 中山エミリさんは同じ日本人なのに、発音がいいなと感心しています。
- ドイツでの諸注意（食べ物、ものの買い方など）も掲載されているので、実際にドイツに行ったときに役立ちそうな気がします。さらに、ドイツサッカーコーナー、スタジアムのある都市の紹介など、ドイツワールドカップの話題も知ることでき、同時にサッカー用語も学ぶことができるので、サッカーに興味のある僕にとっては非常によいコーナーだと思います。

３．複言語主義と複言語的能力

複言語主義とは、ほんの少しの語彙でも多くの言語に触れて言語の引き出しを多様化することを目指し、特定言語の母語話者の語学力習得を最終目標にした言語教育観とは対極の軸をとります。Common European Framework of Reference for Languages の考え方を参考に、可能な限り明示的に身近な目標を設定するように努めます。

４．授業外の学習に Moodle は役立つか？

宿題、部活動などで忙しい中学生に、Moodle の投票で「授業以外の時間で、この１週間にどのくらいドイツ語に触れましたか？」と聞くと大多数が１０分以内と答えました。それが支部大会の終わった 6 月から「来週、自分の電話番号をドイツ語で言ってもらうよ」「相手の言った番号の書き取りをします」といった課題をだすと時間は徐々に増えてきました。学習の動機付けは CMS のシステムが生み出しているのではなく、私が出す宿題やテストが作っていて、課題が具体的に明示されないと個々の活動にまでつながらないというわけです。

Moodle 自体はおもしろいらしく、授業中に自己紹介文を書かせるとインターネットで使える辞書や翻訳サイトを探して予想以上に書き込みますが、続きを自宅でやろうということにはなりません。ドイツ語より「やらなければいけないこと」「やりたいこと」がもっとあり、優先順位があがらないのです。要するに Moodle の仕掛けを活かすには、強制や競争のある活動を組み込んで、締め切りを明示する、ということが大切なようです。

５．そしてロシア語

2 学期になりロシア語を始めました。文字と発音になれる時間を最大化するため Moodle はしばらく封印しています。実際、キーボードより手で書いた方がはやいのです。でも、Moodle は７５の言語に対応しているので、3 ヶ月経ったらどうなるかやってみたいと思っています。

学習環境研究部会

CALL、LL 教育システム意見交換会のご案内

LET 関東支部学習環境研究部会では、CALL システムとはどんな施設・設備を意味するのか知りたい方、これから CALL システムの導入を考えているがどのようなポイントに注意してシステムを比較したらよいのかよくわからない方、すでに導入はしてみたものの、使い方、操作方法にまだ馴染んでいない方、CALL システムではどのような授業ができるのか知りたいと考えている方などのために、CALL、LL システムを制作している学会賛助会員メーカーとの意見交換会を企画しました。興味のある方は、会員、非会員を問わずどうぞご参加ください。

（1）意見交換会　主旨について

CALL 教室が LL 教室にとってかわろうとしている昨今、CALL 教室だからこそ可能となる新たな機能が多くある反面、導入経費の高騰や、今まで、LL 教室で何の問題もなく行えた学習活動ができなかったり、実施しにくいなどの問題点があるなど、利用者側から少なからず不満の声が上がっていることも事実です。また、そのような状況から、従来とは異なった立場での新たな発想による LL システムが市場に出始めています。この機会にシステム製作者、メーカーと利用者が両者の思いを交換する場が必要と思われますので、この意見交換会を企画しました。

（2）具体的なテーマについて

a) CALL 教室、LL 教室の設計思想と、メーカーが考える CALL 教室、LL 教室の定義と想定する授業
b) CALL 教室、LL 教室でできること（特に ALL Call, Intercom, Monitor, Model, Pair,　教材送出、家庭学習との連携などに関連して)
c) CALL 教室、LL 教室で行いたい授業／学習活動～利用者のニーズから～
d)デジタル化の功罪～教材送出系、コミュニケーション系の使い分け？～
e)使いやすさを目指したコマンド配列
f)その他

（3）参加賛助会員／担当日程一覧

第 1 回意見交換会　日時；11 月 18 日（土）14;30～16;30
会場；大妻女子大学千代田キャンパス
（詳細は http;//www.otsuma.ac.jp/gakuin/の MENU から「キャンパスライフ」を選択し「交通アクセス」でご確認ください。）
担当賛助会員；（株）アンペール「LL システム」

第 2 回目以降の予定
12 月 2 日　松下電器産業（株）〔CALL〕
1 月 13 日（株）内田洋行　　〔CALL〕
1 月 27 日　アルプスシステムインテグレーション（株）〔CALL〕
2 月 24 日（株）パルデザイン〔LL〕
3 月 17 日　日本ビクター（株）〔CALL〕
☆会場はその都度変更になる可能性もありますので、詳細については、開催日が近づいた段階で、支部ホームページや会員のメーリングリストなどでお知らせします。

（4）学会意見交換会担当

この意見交換会担当は、次の 2 名です。お問い合わせはこちらにお寄せください。

LET 関東支部学習環境研究部会　担当　石川洋一（日米会話学院）
滝本晴男（大妻女子大学）takimoto@otsuma.ac.jp

早期外国語教育研究部会

久埜　百合（中部学院大学）

この研究部会を小学校の英語活動と連動させて研究を続けたい、と願いながら、中々小学校の先生方に魅力あるものにすることができずに居ります。一つには、「小学校では英語を教えるのではなく」という文言から、外国語教育とか、英語教育という匂いのある学会に先生方が足を運ばれることにたじろぎを感じられる、ということがあります。でも、去年ごろから椎名先生や吉成先生を中心にして始まった小学生の英語の語彙習得を聞き取り能力で数値化しようとするシステムの研究は、公・私立の小・中学校英語担当教師の関心をひきつけました。まだ開発の段階ではありますが、今後とも研究を続けていきたいと思っています。

小学校の学級担任が、効果的な教材を活用することによって英語の授業が出来る、ということでＮＨＫ学校放送の「えいごリアン」の映像とホーム・ページのゲームを使っている、という報告がふえています。小学校教員がＰＣを使いこなし、ホーム・ページを子どもたちと作っている現状で、このような教材の開発が進めば、小学校英語はもっと内容豊かなものになると思います。また、e -learning を利用して、教員の現場研修が活発化すると、もっと小学校英語のノウハウが伝わりやすくなるでしょう。夢は膨らむ一方ですが、実現させる技術が伴わないのが実情です。これからもＬＥＴの先生方のご指導をいただきながら、小学校英語の現場をサポートできる部会として研究を進めていきたいと願っております。

編　集　後　記

★この「３８号」から、支部だよりの印刷物での郵送はなくなり、ホームページ上の掲載となります。
今後ともよろしくご協力をお願い申し上げます。
この 10 年ぐらいの間に、教育現場は目覚しい変化を見せました。これほどまでにコンピュータが浸透してくるとは思いませんでした。
「食わず嫌い」ならぬ「触らず嫌い」にならず、積極的に学会に参加し、研鑽を積みたいものです。かならず悩みは解消されると思います。この「支部だより」も、情報をお伝えする一助になったら幸いです。これからも内容の充実にいっそう努力したいと思います。

石丸　玲子　ishi-mr@nifty.com

★修学旅行の学年では、飛行機での機内アナウンスを授業に取り入れています。今までは自分の担当クラスに留まっていたのですが、本年度からは非常勤の先生方のクラスでも合同授業形態（ティームティーチング）をとって、CALL 教室を協同で使用して音声提出をさせる授業を展開しています。
生徒たちを前にしながら、教員も指導法や操作を学びあっています。非常勤の先生方も目を輝かせながら、ブースでの操作を学び、それを用いてその同じ場で生徒たちをアシストしています。「一日学べば一日の師である」という言葉通りに『研修⇒指導』と即座に行っております。みんなでティームを組んで何かをやるのは楽しいことです。　ＬＥＴへも是非お誘いしてみようと思っております。　**小林　順子**　kobajun@tkc.att.ne.jp